

小野コレクション伊賀上野地震のかわら版について

東京大学社会情報研究所客員助教授 北原 糸子

On the Kawaraban (broadsides) of Iga-Ueno Earthquake (1854) in Ono Collection

Itoko KITAHARA

Associate Professor (Visiting), Institute of Socio-Information and Communication Studies, The University of Tokyo

HZW02641@nifty.ne.jp

Ono Collection has about 600 pieces of the Kawaraban (broadsides), a kind of newspaper in the Edo period. About half of them were published at the time of the great natural disasters after the end of 18th century. The present article describes how the Kawaraban disseminated the information of the natural disasters in the case of the Iga-Ueno earthquake (1854).

はじめに

東京大学社会情報研究所に蔵される小野秀雄コレクションは、かわら版や新聞錦絵が収集されたものとして著名である(注1)。1999年10月、社会情報研究所50周年を記念して、小野コレクションの展示が行われた。それに先立って行なわれた同コレクションの調査・研究およびかわら版の解説作業に参加する過程で、伊賀上野地震についてのかわら版が10点収集されていることがわかった(注2)。

以下では、伊賀上野地震のかわら版の紹介を兼ね、同コレクションにみられる災害かわら版の特徴などについて簡単に述べておこう。なお、同コレクションかわら版578点のうち、約半数の257点が災害関係のかわら版である。このうち、火事(113点)、地震(124点)が圧倒的多数を占める。地震では、1850年代に連続する小田原、伊賀上野、安政東南海、江戸の地震かわら版が105点に達し、大地震で被害が大きかったものについてかわら版も多数発行されていたことがわかる。

§1. 伊賀上野地震のかわら版

日絵「聞書 大地震並びに出火の次

第」(36cm×49cm)は、小野コレクションのうちにある上野地震のかわら版の一枚である。10点のかわら版は記述内容、挿絵などから、およそ7つのタイプに分けられる。つまり、10点といっても同様の内容の異版があり、ことごとく異なることを伝えているというわけではない。そこで、10点のそれぞれの表題、その他の書誌情報を簡単に摘記し、記述内容から分類を施したものを挙げ、その概要を説明しよう(表1)。

まず、地震 No17は、大坂では、6月14日の地震によって岩の間より「霊水」が湧き出し、昨年の日照りとは違い、この「霊水」を豊年の徴として、人々がお陰踊りに興じたことを伝える。これをAタイプとしたのは、被害情報を主とした他のかわら版とは全く異なる内容だからである。

Bタイプの地震 No18、No19、CのNo20、No21は、紙面の構成が似通っていて、内容も大同小異である。このうち、No20は、「大坂心齋橋通り文正堂」と版元名も掘りこまれている。EのNo22、No23は、情報が各地の建物などの被害に限られていて、前者とは異なる情報源に基づくものと推定されるが、対象となる震災被害地は同じようなところが取り上げられているので、情報を比較

する意味で、表2に内容を摘記した。これについては後にまた触れることにする。

D の No21は、絵地図によって、場所を示し、その被害を記述したものである。なんらかの震害の及んだ範囲として、北は日本海沿岸の加賀大聖寺から丹波亀山辺、太平洋側は伊勢神宮から和歌山までを示す。

F の No25は、伊勢地方の被害範囲を地図に表したものであるが、地名が挙げられるだけで、各地の被災状況については触れるところがほとんどない。ただ、「それ天地不時の変動は陰陽混じて、天にあれば雷雨となる、地にあればじしんとなす…」という序文がつけられていることに注目しておきたい。この時期以降の頻発地震に際して発行された数多くのかわら版の書出しには、この類の文言が認められるようになる。陰気が陽気を押さえ安定していた天地が、陽気の活発化で地震や噴火が起きるのだとする考えが共有されていることを示している。

G の No26 は、尾張、伊勢、近江、美濃四カ国の地震被害を、東海道筋を中心に簡単に伝えるものである。上記 A～F とは情報源が異なると考えられる。

§2. 災害かわら版の特徴

さて、かわら版とは一般に、江戸時代の無届の刷り物で、出版する当事者の所在・名前も明かさな匿名の情報であって、事件の速報あるいは批判・風刺的内容などを盛りこんだものと理解されている。また、街角や絵草子屋で売られる有料のものであるという点も重要なポイントだとされている。この点は、江戸時代には新年の挨拶代わりや、引札など、無料で配られる摺物などと区別を立てるためである。

しかし、すでに口絵の内容(口絵の解説文参照)から明らかなように、災害かわら版に関していえば、風刺性などというものは一

向に感じられず、客観的に正しいかどうかは別にして、単なる事実の報道という性格が強い。鯰絵などを含めれば、これまで災害かわら版といわれて来たものにも多様なものがあることは事実だが、概して災害発生的事实を伝えようとするものにはそれに徹するという共通した特徴がみられる。その事と無関係ではないと思われるが、番付・暦・武鑑などを言葉遊びでもじって、その出来映えを競うような類のかわら版と比べると、災害かわら版の類は紙型が大きく紙質もよいものが多い。したがって、かわら版には災害物と、そうでないものとの大きく二つの系統があるとしてよいと思われる。つまり、かわら版でも、災害報道に終始するものは、形態の上からも、隠される私的情報というより、災害情報としての社会的必要が認められた公の情報という性格がつよい。さらにいうならば、無届ということが連想させる反幕府、反権力的な要素は、災害かわら版では顕著には認められない。江戸時代においては、そうした要素はむしろ、出版されたマス・プリントではなく、写本や書状などで流布した落書と呼ばれるものに濃厚にみられるのであり、出版されるものとしてのかわら版では、そもそも社会批判の要素は強くない。これは、もっぱらかわら版を作って売る商売の読売たちがこれによって糊口を得るための安定した手段としていたからである。以上のことを前提に、表2をみよう。

§3. 伊賀上野地震の場合

ここでは、先に述べた B、C、E のタイプの情報内容を表2によって比較検討し、災害かわら版の江戸時代における社会的役割などについて述べることにする。

B、C、E、それぞれのタイプのかわら版が報ずる内容は、概して単純である。どこで、いつ、どんな災害が発生し、被害はどの程度かということに尽きる。そこで、伊賀上野

地震のかわら版の記述の内容を、場所、発生日時、状況、被害(建物、人)に分けて摘記すると、表2ようになる。これらの記述の内容を、「新収日本地震史料」別巻四に収録された伊賀上野地震の記録と照合させると、かわら版の情報の質がある程度見当付けられる。同書に収録された資料の検討を行っていないので、現段階では表2の情報の判定を行なうことは出来ないが、粗々比較した限りでは被災状況、建物被害などに関する情報には大きく齟齬するところはなさそうである。かわら版情報が特に地震発生時刻にこだわっていることは興味深い。これを以って発生時刻に地域差があったことを立証することはこの時代の時刻制度から見て問題があろう。しかし、液状化現象を伝えると思われる記述があること、余震情報に詳しい点などは、この地域に関わりを持つ人の関心がどこにあったのかを示している興味深い。かわら版の災害情報は、情報源が飛脚問屋などからもたらされる場合が多く、単なる伝聞情報ではなく、実際の被害を見聞きした人の発信情報が盛り込まれているからであろう。ただし、人的被害については、そもそもこうした情報が公にされる性質のものではなかったということによったためか、表2のなかにおいても区々であって、この限りでどれが被害の実態をあらわすのか判定しがたい。また、越前福井については、13日の同地での大火情報だけのものがみられる。これら B、C、E のグループは、災害情報としては、逸早く被災地近辺に向けて発せられたものと推定される。このうちでも、B を B1・B2と分けたのは、B2の情報はそのままとして、版木を埋め、南山城・木津の被害を新たに彫り込み、情報を付け加えて売り出したことが明瞭に判るからである。これに比べより広い範囲の情報を扱う D のような場合は、情報が整理される経過を経て後、より広い市場に向けて発せられたもの

と思われる。

まとめ

かわら版の災害情報の実際を伊賀上野地震の場合について小野コレクションのうちから紹介した。災害情報に限って言えば、かわら版情報といえば、精度の低い情報とみられがちであるが、必ずしもそうではないということ、しかも同じような版のものが数多く残されていることは、当時、高い需要があったことを証明している。また、新たな情報を付け加えて行く工夫がなされていたことも確認できた。しかし、人々がこうした被害情報だけを求めていたのではないことは、たとえば A のタイプとした No17 のような場合から窺われる。

災害情報を通して、人はなにを知ろうとしたのか、メディアの役割を考える上で江戸時代のかわら版災害情報は情報の精度ということを超えてさらに研究されてよい課題と考える。

(注1) 小野秀雄自身にコレクションの解題を兼ねたかわら版の分析は『かわら版物語』(雄山閣、1960)、新聞錦絵については『新聞錦絵』(毎日新聞社、1972)がある。

(注2) 吉見俊哉・木下直之編『ニュースの誕生—かわら版・新聞錦絵の情報世界』(東京大学出版会、1999)巻末にはコレクションの全目録が掲載されている。また、『小野秀雄コレクション』(CD-ROM 社会情報研究所、1999、非売品)は、かわら版578点、新聞錦絵302点の全コレクションの画像と解説文を収録されている。

表1 小野コレクション伊賀上野地震関係かわら版

分類番号	題名	法量(cm)	分類
地震No17	嘉永七寅六月十四日大地震ニ付て	18×29	A
地震No18	聞書 大地震並びニ出火の次第	36×49	B1
地震No19	聞書 大地震並びニ出火の次第	33×46	B2
地震No20	聞書 諸国地震並出火	36×49	C
地震No21	大地震早引方角付	36×49	D
地震No22	大地震記	34×50	E
地震No23	大地震記	26×39	E
地震No24	聞書 諸国地震並出火	33×46	C
地震No25	伊勢国大地震略図	35×47	F
地震No26	尾張国大地震(仮)	24×30	G

表2 小野コレクション伊賀上野地震かわら版

その1

	場所	地震揺り始め	状況	余震	倒壊建物	火災	死者	その他
B	南都	14日夜八つ時より15日明六つまで少々	15日朝五つ時、大地震	21日夜五つ時、23日まで85度の揺り	西方寺本堂・高畑神主高塚砕け、崩れ家数知れず、		350人	
C	奈良			21日夜また地震	町崩家500余、土蔵87		即死150人	知れず
E	奈良	14日夜八つ時より15日明六つまで少々	興福寺その外明地、大道にて野宿					
B	伊賀上野	14日夜七つ時半荒れきつし	島が原50丁四方螺のため泥海のようになる		城大手門大損じ、家倒れる	出火焼失あり		
C	伊賀上野				崩家700軒、土蔵120余、		600人	
E	伊賀上野		島が原より大川原まで螺のため泥海のようになる	16日暮まで75度度揺る	城大手門大損じ、市中六分通り崩れ、四分差になる	鍵の辻より出火、黒門前まで焼失		
B	石部	14日夜七つ時揺り始め			所々人家痛む			
C	石部				崩家120軒、土蔵21、		16人	怪我人70
B	水口土山	14日夜七つ時大揺れにはこれなく、			両宿少し損じ			
C	水口土山				崩家130、蔵45余		16人	怪我人50
E	土山				4、5軒づつ、7、8ヶ所崩れる		人六分通り押しに打たれ、四分助かる	
B	石山			16日暮まで68度揺る	大岩崩れ、城下・在町崩れる			
B	亀山	14日夜七つ時揺り始め、	西辺、家損じ、格別の大荒れなし					
C	白子庄野亀山	大荒れ						怪我人170
B	岡崎	14日夜七つ時揺り始め、	東辺少し家痛み、	度々揺れる				
B	四日市	14日夜四つ時揺り始め、つ時大地震、			家数500軒余くずれ	15日昼五つ時出火、400軒焼失	245人	行方不明 550~60人
E	四日市	14日夜四つ時揺り始め、六つ時大地震、			300軒余崩れる	昼五つ時出火400軒焼失	140~50人	行方不明 200人余
B1	古市	14日夜六つ時大地震、	池割れ、人家多分くずれ		残る家3軒ばかり		60~70人	
B2	南山城・木津	14日夜九つ時半より黒雲降る	石降り、笠置山より大岩吹き出す、大水たまる	15日九つ時水さっぱり引く	家10軒ばかり崩れ、流れる			
E	古市、木津			16日暮まで73度揺る	家4、5軒残る			

表2 小野コレクション伊賀上野地震かわら版

その2

	場所	地震揺り始め	状況	余震	倒壊建物	火災	死者	その他
B	江州信楽	13日雷鳴きびし、14日大地震、	町々荒れ、人家倒れる		家130軒、土蔵18、9戸倒れ		即死、怪我人数知れず	
C	江州				崩家100軒余、土蔵16		即死45人	怪我人100人余
B	膳所・石場	14日夜六つ時大地震、			城構高屏湖水へ落ち込む、舟乗り場石灯笼湖水へ倒れる	北の大手出火菩提所焼失	横死者あり	
C	膳所				崩土蔵24、倒れ家98		7人	怪我人50人余
E	膳所				御城少々損じ			
B	大和郡山	14日夜九つ時少々揺り始め、八つ時大地震		18日、21日六つ半揺り返し85度揺り	柳町一丁目～四丁目まで家38軒くづれる、市中3分通り家崩れる		死者120～30人	
C	大和郡山				崩家72～73、土蔵18余		即死23	怪我70～80人
E	郡山南大和	14日夜九つ時少々揺り始め、八つ時大地震		16日暮まで73度度揺る	柳町一丁目～四丁目まで家38軒くづれる、市中3分通り家崩れる			
C	大津、屋花川				崩家80～90、土蔵28		即死32人	怪我人60
E	屋花川				家数100軒余崩れる			
B	越前福井	14日夜八つ時より 15日明六つまで少々大地震	田地泥海になる	16日暮まで大小67～68度揺る	地震にて家々崩れる	13日昼五つ時出火、城下残らず焼失、大風にて九十九橋より200丁両本願寺寺院10ヶ所焼失、夜四つ時鎮まる	死者凡そ40～50人	
C	越前福井					13日朝より夜四つ時まで大火、町数200余丁・家数5500余寺社113 土蔵60～70		
E	越前福井	14日夜八つ時より大地震	田地泥海になる	16日暮まで大小67～68度揺る	地震にて家々崩れる	13日昼五つ時出火、城下残らず焼失、大風にて九十九橋より200丁両本願寺寺院10ヶ所焼失、夜四つ時鎮まる	死者凡そ40～50人	